

2006年防災教育チャレンジプラン最終報告書

記入日 2007 年 1 月 26 日

I 概要

実践団体・担当者名	神戸学院大学 学際教育機構 防災・社会貢献ユニット (担当者: 船木 伸江)	
連絡先	電話 078-974-1551 (代) 078-974-2496 (直通)	
プランタイトル	先生の悩み解消! -大学生による各教科対応型防災教育キットの作成-	
目的	「学校教育の各教科」の中で学ぶことができる防災教育の教材開発を、防災を専門的に学ぶ大学生の手で作成し、学校で、防災教育を手軽に行ってもらえるような教材を開発する。これらによって、普通教科の時間の中で手軽に防災教育が実践できることを全国的に発信し、小学校でこれまで防災教育に取り組んだことのない先生が手軽に防災教育を実践し、防災教育の普及に貢献することを目指す。また、教材作成を通じて、大学生たちの防災知識の定着、意識の高揚を図る。	
プランの概略	防災を専門的に学ぶ大学生によって、小学校5年生の全教科(国語・社会・算数・理科・音楽・図画工作・家庭・体育)における防災教育のキット作成を行った。この防災教育キットは、小学校5年生の学習指導要領の目的・勉強内容に沿った形で作成した。また、学習指導要領だけでなく、防災関連の文献だけでなく対象学年の教科書なども参考にしながら、1時限の授業に対応できる防災教育キットを作成した。そして大学生同士でこれらのキットの内容を発表、相互評価し改良を加えた。その後、姫路市立旭陽小学校で実際に実践し(のべ22回の授業で実践)、先生方からの意見や生徒から感想を受け取った。その後、実践による気づき、先生方や生徒からのフィードバックを元に改良を加え、最終的に全教科のセットを作成した。また、これを見れば誰でも簡単に防災教育を実施できるような指導書を作成した。	
プランの対象と参加人数	教材作成に関係した大学生 50名 大学生が作成してくれた教材を体験した小中学校生徒 約500名	
実施日時	継続的な教材作成作りの実施(2006年4月から2007年1月) 小学校における防災教育(2006年6月20日、2006年12月7日、2007年1月18日)	
主な実施場所	姫路市立旭陽小学校 神戸学院大学	
連携した団体名、 連携の方法	連携団体の有無	有
	連携した団体名	姫路市立旭陽小学校 語り部 KOBE1995 兵庫県立盲学校 阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター
	連携したきっかけ・理由	<ul style="list-style-type: none"> 作成教材を小学校で実践させてもらうため、以前から大学生による防災教育の依頼があった姫路市旭陽小学校に打診した。 阪神・淡路大震災についての理解を深めるために、京都大学防災研究所矢守助教授を通じて、語り部 KOBE1995とのミーティングを開始した。 「体育」の教材で、当初、災害時要援護者の避難の苦勞を知る教材を作っていたが、中間報告で実際に災害時要援護者の方とコンタクトを取ってはどうか、というアドバイスを委員の先生方から頂き、兵庫県立盲学校にコンタクトを取り、盲学校の先生方に地震の際の話などヒアリングを行った。 「図工」の教材で、阪神・淡路大震災当時の絵画を探しており、人と防災未来センター貯蔵の資料を使わせてもらう許可をもらうため、コンタクトを取った。
	連携団体へのアプローチ方法	コンタクトは電話でまずとり、後に何度か伺って直接話をした。

	連携団体との 打合せ回数	電話、FAX などのやり取りを 20 回以上かさね、直接 2 度会い、ミーティングを行った(姫路市立旭陽小学校) 電話、メール、FAX で、20 回以上やり取りを重ね、直接会い、意見交換を 5 回行った。 電話でコンタクトを取り (3・4 回)、直接伺ってヒアリングを行った (兵庫県立盲学校) 電話でコンタクトを取り、直接伺って資料を見せてもらった (人と防災未来センター)
	連携団体との役割分担	姫路市立旭陽小学校には、授業の時間を調整してもらった。神戸大学生が、手製の教材を持っていき、防災教育授業を行った。

Ⅱ プラン立案過程

プラン立案 メンバーの 人数・役割	団体内のスタッフ総人数	51 名
	外部スタッフの総人数	28 名
	主なメンバーの 役職・役割	団体スタッフ (神戸学院大学生 50 名) 教材作成、小学校での防災教育授業の実施、教材改訂、指導書の作成 (神戸学院大学教員 1 名 学生が、教材作成、小学校での防災教育の実施、教材改訂、指導書の作成を行うにあたっての指導)
プラン立案に要した 日数・時間	立案期間	2006 年 4 月 ~ 2007 年 1 月
	立案時間	授業時間、授業の空き時間によるミーティング (50 時間程度及びそれ以上)【準備期間を含む】
	上記のうち打合せ回数	30 回以上
プラン立案で 注意を払った点 工夫した点	小学校の学習指導要領との関連 小学 5 年生の文章理解度、漢字の語彙能力 教科書に書かれている内容 これらの防災教育を通じて何を学んで欲しいか	
プラン立案で 苦労した点	アイデア出しから、教材を形にするにあたって、様々な問題がでて、それを一つ一つ解決してきた点。 小学生の文章理解度、漢字の語彙能力を調べること 教育経験のない学生スタッフが 45 分の授業時間内にプログラム内容をまとめること	

Ⅲ 実践にあたっての準備

準備に関わった方 と人数・役割	団体内のスタッフ総人数	51 名
	外部スタッフの総人数	20 名

	主なメンバーの 役職・役割	<ul style="list-style-type: none"> ・ 団体スタッフ (神戸学院大学生 50名) 教材作成、小学校での防災教育授業の実施、教材改訂、指導書の作成 (神戸学院大学教員 1名 学生が、教材作成、小学校での防災教育の実施、教材改訂、指導書の作成を行うにあたっての指導) ・ 外部スタッフ (姫路市立旭陽小学校 校長先生、教頭先生を含んだ 20名程度の先生方) 小学校での防災教育授業の調整 (兵庫県立盲学校でヒアリングを行った際に対応をしてくれた先生方 4名、学校長) (人と防災未来センターに絵を寄贈した佐々木久仁男氏と佐々木氏とのコンタクトに協力してくれた人と防災未来センターの震災資料専門員の方々 2名) (阪神・淡路大震災の状況を教えてもらった語り部 KOBE1995 の語り部の方々 5名、うち、1名は元小学校教員であったため、学生の教材作成へのアドバイスをもらったり、授業に見学に来てもらい、授業の評価も見てもらった)
	準備期間	2006年 9月 30日 ~ 2007年1月17日
	準備に要した日 数・時間	準備総時間 授業時間、授業の空き時間によるミーティング (250 時間程度及びそれ以上)
教育関係への 働きかけ	上記の内打合せ回数	70 回以上
	働きかけた教育関係者・ 機関名	兵庫県姫路市立旭陽小学校
	どのように働きかけたか	電話、FAX などのやり取りを 20 回以上かさね、直接 2 度会い、ミーティングを行った(姫路市立旭陽小学校)
地域への 働きかけ	結果	全面的な協力が得られ、2 日間(2006年 12月 7日、2007年 1月 18日) のべ 22 回の学生による教材試作版の授業を行った。
	働きかけた地域の人・ 機関名	
	どのように働きかけたか	
保護者・PTAへ の働きかけ	結果	
	働きかけた保護者・ PTA組織名	
	どのように働きかけたか	
機材・教材の 準備方法	結果	
	用意した機材・教材	小学校 5 年生の各教科に対応できる教材 8 種類の作成、準備、改訂
	入手先・入手方法	模造紙やペン、コピー用紙などにより、試作版は学生がパソコンを駆使して、手作りで行った。 最終成果物は、学生の手作り教材を元に印刷所において印刷中。

	<p>機材・教材選定の理由(なぜこの機材・教材を選んだのか)</p>	<p>現在、全国的に防災教育が行われているが、地域によっては活弁な場所とそうでない場所があったり、総合的な学習の時間での取り組みなど大掛かりなものが多い。また、現役小学校の先生は、あまり防災教育の経験がない方もいるため、防災教育への力の入れ方には偏りがあっていたりしている。</p> <p>しかし、現在の小学校における防災教育について①総合的な学習の時間だけでは、防災教育が特殊な教育である印象を与えてしまうこと、②総合的な学習の時間だけではなく、一般の教科でとりくまなければ、総合的な学習の時間がなくなれば、それに伴って防災教育もなくなってしまう可能性があること、を懸念したため、「日常の科目」に取り入れることができるオリジナルの防災教育キットを作成した。</p> <p>また、可能な限り手軽に使ってもらいたいため、防災教育の投げ込み教材をイメージし、45分で完結できる内容のものを作成した。</p> <p>これらはまだ確立した教材がないため、まったくの手作りで行った。</p>
参加者の募集	募集方法	<p>神戸学院大学では防災・社会貢献ユニットの学生全員(50名)が何らかの形で携わった。</p> <p>姫路市立旭陽小学校は、小学校の先生方が、授業を行うクラス等を調整したため、参加者の特別な募集はしていない。</p>
	募集期間	年 月 日 ~ 月 日
	参加予想人数	名
	実際の参加人数	名
	募集方法の成功点	関連なし
	募集方法の失敗点	関連なし

準備で苦労した
点・工夫した点

小学校の学習指導要領の理解を深めること、小学5年生の文章理解度、漢字の語彙能力についての理解を深め、レベルにあった教材を作成すること。

教科書に書かれている内容に沿った、もしくは、それまでの学習の復習になるような内容にまとめること。また、先生用の指導要領への詳細な記述、教材の目的、趣旨、これらの防災教育を通じて何を学んで欲しいかについて明確に記述すること。

45分の授業時間で終わるよう、授業を構成すること。

●各教科別

【国語】教材の文章は、語り部 KOBE1995 の代表をされている当時小学校の教員をされていた田村勝太郎氏の語りをもとにした。避難所では大人が手伝わず、子どもたちが手伝っていたこと、懸命に先生や避難者のお世話をする子どもたちに影響を受け、だんだんと避難所の雰囲気や大人たちの態度が変わってきたことを内容とした。この手伝いをしたのは、小学校5年生の生徒数名で、小学5年生の教材にはびったりと考え、これらの文章から、漢字や文章が意図する部分を読み取る問題、人間としてのあり方を考える問題を作成した。

【理科】すごろくゲームと人生ゲームを組み合わせたゲームをつくり、教科書で習った理科の学習や防災の知識について「楽しく」学べるよう工夫した。マスにとまったら問題に答える形式だが、解答は解説も準備した。

【体育】災害時要援護者の中でも特に、視覚障害者に対象を絞り、ただ、目が見えない「怖さ」を経験してもらっただけでなく、町で困っている視覚障害者にももしも出会ったら、「正しく」お手伝いや手引きができるよう、学習する教材にした。また、困っている人に会うだけでなく、目が見えない人への普段からのコミュニケーションの重要性も組み込んだ。

【社会】誰もが知っているまちあるきのマップ作りのプログラムを下に、学校の外にでなくても「まち」について学べるよう、誰もが知っている架空のまちで学べる教材を作成した。小学生の誰もが好きな「ドラえもん」の町を使用した。「ドラえもん」については、当初著作権等の問題が懸念されたが、小学館横田氏を通じて不二子プロに連絡を取ってもらい、販売目的でない今回の教材作りについては、メインの5人のキャラクターの絵、ドラえもんの言葉など使用の許可を得た。

ドラえもんの使用により、子どもたちはより主体的に取り組める内容となった。この教材では、4年生で習う地図記号の復習や5年生で習うまちについて考える内容が組み込まれている。

【図工】災害時に描かれた絵は赤や黒といった暗い色づかいの絵画が多い。これは、描いた人の「心の色」を表現したものであるからである。災害時の写真や記憶をたどり、当時被災した学生が描いた絵をワークシートにして配布し、それに色をつけてもらう、その後、学生がイメージした色の解説、また、場所は違うが赤や黒をふんだんに使用した震災の絵画の説明をする。最後に、震災当時の写真を見せ、当時の状況を理解してもらおうと共に、現在の復興は人と人とのつながりがあったからこそ成し遂げられたものという解説を行う。絵画から描かれた「意味」を読み取ってもらうことを目的としている。

【音楽】神戸市の音楽教員であった臼井先生が作詞作曲した「幸せ運べるように」、を曲の作成経緯を考え、歌うもしくはリコーダーで吹いてみるという内容である。現在、神戸市兵庫区にある明新小学校に勤務される臼井先生へのインタビューを行い、当時歌が作成された経緯について調べた。

幸せ運べるようには、神戸では知られた歌であるが、県外では認知度も低くなる。しかし、この歌で励まされたこと、すばらしいメロディラインであることから、被災した人の心に届いた歌を歌いながら、想いを共有してもらうことを目的としている。

【算数】非常持ち出し袋に入っている(入れて欲しい)非常グッズをカードにして準備し、それに対応する値段表を作る。また、値段表には〇割引といった、価格の割引設定をつけ、自分たちが入れたい非常グッズは予算価格(予算価格は事前に設定)で収まるか計算してもらう。非常グッズのカードの裏には、災害時に役立つ方法や解説が書いてあるが、本当に必要なものを予算内で準備するにはどうすればいいかグループで考えてもらう。5年生で習う、割引のやり方を実践的に学ぶ方法である。

【家庭科】非常持ち出し袋に入っている(入れて欲しい)非常グッズをカードにして準備し、オリジナルの非常持ち出し袋を作成してもらう。ただし、入れられるグッズは9個+自分たちで考えた1個のスペシャルグッズのみ!非常グッズのカードの裏には、災害時に役立つ方法や解説が書いてある(算数の教材と同じもの)。必要なものは多いとは思いますが、いくつももてないし、本当に必要なものは何か、また、袋に入らなかったグッズでも、役立つことがあるということを理解してもらう。スペシャルカードは、家族のニーズに合わせたものを考えてもらうものである。例えば、子どもがいる家ならいない家とは準備するものが違うことを学んでもらう。

IV タイムスケジュール（プラン立案から実践終了までのスケジュールを記載して下さい。）

	プラン立案	実践にあたっての準備	実践
2005 11月			
12月			
2006 1月		姫路市立旭陽小学校からの依頼による防災教育の実施	
2月			
3月			
4月		小学校高学年用教科書の購入 防災・防災教育についての勉強	
5月		防災・防災教育についての勉強	
6月		小学校の学習指導要領に関する勉強 防災・防災教育についての勉強 姫路市立旭陽小学校からの依頼により、自然学校のお手伝い（防災教育に関するスタンプラリーの企画、実施）の実施	
7月		小学校の学習指導要領に関する勉強 防災・防災教育についての勉強	
8月		教材作成のミーティング 教材作成準備	教材の案だしミーティング
9月		教材作成のミーティング 教材作成準備	教材作成のミーティング 教材作成準備
10月		教材作成のミーティング 教材作成準備 教材の改訂 姫路市立旭陽小学校との打ち合わせ 印刷所との打ち合わせ	教材作成のミーティング 教材作成準備・改訂
11月		教材作成のミーティング 教材作成準備 教材の改訂 姫路市立旭陽小学校との打ち合わせ 印刷所との打ち合わせ	教材作成のミーティング 教材作成準備・改訂
12月		教材作成のミーティング 教材作成準備 教材の改訂 印刷の開始	12/7 姫路市立旭陽小学校における防災教育（小学生に試作品の実施）
2007 1月		教材作成のミーティング 教材作成準備 教材の改訂	1/18 姫路市立旭陽小学校における防災教育（小学生に試作品の実施・一部改訂作品の実施）

V実践の詳細 【C. 小学校の各教科の時間】(継続的な学習を45分を1コマとして記入して下さい。)

タイトル	【国語】こどもボランティア	【社会】ドラえもののまちで学ぼう	【体育】災害時要援護者体験(視覚障害者)	【理科】Let's 防災すごろく
実施日	2006.12.7	2006.12.7	2006.12.7	2006.12.7
所要時間	45分×2回(違うクラスにて)	45分×2回(違うクラスにて)	45分×2回(違うクラスにて)	45分×2回(違うクラスにて) 45分
達成目標	阪神・淡路大震災時に小学校5年生がボランティアをした文章を読んで、当時の状況を知ってもらい、人と人とのつながりの大切さを学ぶ。また、小学校5年生レベルの国語の勉強も行う(漢字、文章の読み取り)	ドラえもののまちの中にある施設から、災害時に役立つもの、避難所の場所や役割などについて学ぶ。また、小学校4年生で習っている地図記号の復習の勉強も行う。	災害時要援護者の中でも特に、視覚障害者に対象を絞り、ただ、目が見えない「怖さ」を経験してもらうだけでなく、町で困っている視覚障害者にももしも出会ったら、「正しく」お手伝いや手引きができるよう学ぶ。また、助け合いに大切さを学習する	すごろくをやっていく中で、防災の問題や理科のこれまでに習ってきた内容の問題を学習する
生成物	生徒の回答が書かれたワークシート(各自、家にもって帰ってもらい、親と話をしてもらった)。	生徒の回答が書かれたワークシート(各自、家にもって帰ってもらい、親と話をしてもらった)	なし	なし
進め方 (箇条書き)	<ul style="list-style-type: none"> ・こどもボランティアの文章をみんなで読む ・各自、プリントに書かれた設問を解く ・全体で答え合わせをし、当時の状況、自分たちが感じたことについて話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各自ワークシートの設問について解いてもらう ・全体で答え合わせをする。その際に、どこを避難所の場所として選んだか、など、話し合う 	<ul style="list-style-type: none"> ・部屋の机の状態を変え、簡単な障害物を新聞やロープなどで作る。 ・2人1組になって、まずは一人がアイマスクをして、それぞれ思い思いに歩いてもらう。 ・一通り終わったところで、正しい手引きの仕方の解説をする。 ・ペアのもう一人にアイマスクをしてもらい、正しいやり方での実践を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・すごろくを解く(すごろくのマスは3種類あり、理科の問題や防災の問題を解いていく。理科の問題は、それぞれに解答・解説を準備しているので、すごろくをやりながら、解答のチェックを行う) ・問題に正解すると幸せポイントがもらえる。 ・最後に防災の問題について解説をする。
ツール (特別に用意したもの)	ワークシート	ワークシート	アイマスク 新聞紙 ロープ	防災すごろくセット さいころ
場所	姫路市立旭陽小学校	姫路市立旭陽小学校	姫路市立旭陽小学校	姫路市立旭陽小学校

V実践の詳細 【C. 小学校の各教科の時間】(継続的な学習を45分を1コマとして記入して下さい。)

タイトル	【家庭】オリジナルの非常持ち出し袋を考えよう	【音楽】幸せ運べるようにをリコーダーでふいてみる	【体育】災害時要援護者体験(視覚障害者)改訂版	【理科】Let's 防災すごろく 改訂版
実施日	2007.1.18	2007.1.18	2007.1.18	2007.1.18
所要時間	45分×3回(違うクラスにて)	45分×3回(違うクラスにて)	45分	45分
達成目標	避難所の状況などを考え、自分たちに必要なオリジナルの非常持ち出し袋について考えてみる。その中で、特に食の重要性について議論してもらう	幸せ運べるようにできた経緯を勉強しながら、歌を歌ったり、リコーダーで吹き、メロディや歌詞の意味を考える。	災害時要援護者の中でも特に、視覚障害者に対象を絞り、ただ、目が見えない「怖さ」を経験してもらうだけでなく、町で困っている視覚障害者にももしも出会ったら、「正しく」お手伝いや手引きができるよう学ぶ。また、助け合いに大切さを学習する	すごろくをやっていく中で、防災の問題や理科のこれまでに習ってきた内容の問題を学習する
生成物	グループでできた非常持ち出し袋の例	なし	なし	なし
進め方 (箇条書き)	<ul style="list-style-type: none"> 各班会で9個だけ選べるとしたらどんなものを非常持ち出し袋に入れるか、35個あるカードの中から選んでもらう。 1つだけスペシャルカードと題して、自分たちでオリジナルのグッズを入れられるとしたら何を入れるか考える。 全体に自分たちが選んだカードについて発表をする 	<ul style="list-style-type: none"> 幸せ運べるようにの説明(できた経緯や阪神・淡路大震災について) 歌詞の意味について考える 歌を歌ってみる リコーダーで吹き、全体で演奏をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 部屋の机の状態を変え、簡単な障害物を新聞やロープなどで作る。 2人1組になって、まずは一人がアイマスクをして、それぞれ思い思いに歩いてもらう。 一通り終わったところで、正しい手引きの仕方の解説をする。 ペアのもう一人にアイマスクをしてもらい、正しいやり方での実践を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> すごろくを解く(すごろくのマスは3種類あり、理科の問題や防災の問題を解いていく。理科の問題は、それぞれに解答・解説を準備しているので、すごろくをやりながら、解答のチェックを行う) 問題に正解すると幸せポイントがもらえる。 最後に防災の問題について解説をする。
ツール (特別に用意したもの)	非常持ち出し袋の中身と役割について書いたカード 非常持ち出し袋の絵	楽譜	アイマスク 新聞紙 ロープ	防災すごろくセット さいころ
場所	姫路市立旭陽小学校	姫路市立旭陽小学校	姫路市立旭陽小学校	姫路市立旭陽小学校

V実践の詳細 【C. 小学校の各教科の時間】(継続的な学習を45分を1コマとして記入して下さい。)

タイトル	【算数】いくらでできるかな？オリジナルの非常持ち出し袋を作ってみよう	【図工】災害時の状況を「色」で表現する		
実施日	2007.1.18	2007.1.18		
所要時間	45分×3回(違うクラスにて)	45分×3回(違うクラスにて)		
達成目標	避難所の状況などを考え、自分たちに必要なオリジナルの非常持ち出し袋がいくらでできるか考える。特に制限の値段内で最大限必要なものを入れるにはどうするのか考える。	絵画に表現された「色」から、描いた人の心のイメージを読み取る。また、表現した色の持つイメージについて考える。絵画に描かれた「意味」を読み取ってもらうことを目的としている。		
生成物	グループでできた非常持ち出し袋の例	自分たちで色付けした絵		
進め方 (箇条書き)	<ul style="list-style-type: none"> ・各班で制限の値段内で選ぶとしたらどのようなものを非常持ち出し袋に入れるか、35個あるカードの中から選んでもらう。 ・値段には値引きのシールがはってあるので、値引き価格を利用して、自分たちが必要なものを最大限入れられる方法を考える ・全体に自分たちが選んだカードについて発表をする 	<ul style="list-style-type: none"> ・阪神・淡路大震災当時の状況を表現した絵(白黒・学生作成)にそれぞれ色を塗ってもらう。 ・全体でどうしてもその色を選んだのかについて説明をしてもらう。 ・絵を描いた被災した学生の描いた「色」について説明する ・当時の状況を写真で説明する ・被災したまち、焼け焦げた町の中にも暖かい人と人のつながりがあり、それらがあつたから、現在のようなまちに復興したことを説明する。 ・最後に、震災当時の写真を見せ、当時の状況を理解してもらつと共に、現在の復興は人と人とのつながりがあつたからこそ成し遂げられたものという解説を行う。 		
ツール (特別に用意したもの)	非常持ち出し袋の中身と役割について書いたカード 価格表	阪神・淡路大震災当時の状況を表現した絵(白黒) 阪神・淡路大震災時の写真 阪神・淡路大震災から復興した写真		
場所	姫路市立旭陽小学校	姫路市立旭陽小学校		

VI実践後

<p>参加者へのアンケート結果</p>	<p>【実践後の小学生の作文から】 今回の防災教育を通じて防災の知識を得ることができたという声だけでなく、「今日をきっかけに、1回防災の本を読みたいと思いました。」と、今後の取り組みのきっかけも伝えることが出来た。算数の教材の感想では、授業で勉強しているという感覚より、楽しんで出来たという声が沢山あった。「防災教育なのに算数としてすると凄く楽しいという事がわかった。」「家族にも教えて災害に強い家族にしたい。」「水の大切さが分かった。」「非常時持ち出し袋の中身には最低限何が必要かわかった。」という声もあった。 家庭科では、小学五年生の生徒が「前、自然学校でお姉ちゃんたちが教えてくれたことを覚えていたから分かった。」という嬉しい声もあった。</p> <p>【実践後の教師の声】 「私達も防災について見直していきたい。」 「今の避難訓練で本当にいいのか分からない。」 「カードを使う家庭科のような教材は、数が多いと時間がかかるので机にカルタのように広げて取り組んだほうが言いという事を、助言してあげることが必要だと感じた。」 「非常時持ち出し袋の中身を考える際に、以前神戸学院大学生が授業をして、自然学校で学んだことを生徒が覚えていることに驚いた。」</p>	
<p>成果として得たこと</p>	<p>小学生のアンケートから得たことで、防災教育は何回も継続して取り組んでいくことで知見が変わっていくのだと感じた。また、体験的な学習方法のよさを改めて実感した。</p>	
<p>成果物</p>	<p>学習指導案、掲載記事、実践の写真は、別ファイルを参照。 ワークシート、ゲームなどは、印刷が終了次第送付します。</p>	
<p>広報方法</p>	<p>広報した先</p>	<p>新聞社、放送局等</p>
<p>広報の方法</p>	<p>大学企画部、HPにおけるニュースリリース 実践先の小学校からの広報</p>	
<p>取材にきたマスコミ</p>	<p>毎日新聞社、読売新聞社、朝日新聞社、神戸新聞社、NHK、サ ンテレビ、姫路ケーブルテレビ、</p>	
<p>広報された内容（掲載された記事・番組等）</p>	<p>別紙データ参照</p>	
<p>成功点</p>	<p>新聞記事を見たほかの学校からも問い合わせがあり、防災教育の依頼があった。 姫路市立旭陽小学校の保護者の方々に喜んでいただけた</p>	
<p>失敗点</p>	<p>姫路市立旭陽小学校との調整により、震災関連事業の一環として防災教育を行って欲しいとのことで、実践を1月18日に設定したが、もう少し前にして欲しかった（1.17以前）という一部報道関係者からの声があった。</p>	
<p>全体の感想と反省・課題</p>	<p>教科の時間内で防災教育をするというのは、学校関係者には新たな視点だったようで、非常に早く実践の許可をもらえた。また、普段嫌いな教科でも、防災教育と結びつけたり、体験やグループワークをすることで、「楽しかった」という感想を小学校から得られたのは、大変うれしかった。普段の勉強が災害時に役立つんだということをし少しでも覚えてもらえたかと思う。他の学年でもやって欲しいとの要望があったので、今後は違う学年や自分たちで作成した教材を広めていく活動をしていきたい。</p> <p>しかし、45分の勉強では限界があり、時間の短さを痛感した。まったく防災教育を受けてない生徒への授業より、少しでも防災教育を受講した生徒への授業のほうが、議論が深まっている状態を感じた。一つの教科の試みで終わることなく、複数時間、継続的に防災教育をやっていくことで、この教材が生きてくることがわかった。</p> <p>最後に、教材作成にはなにより時間がかかったけど、一度こどもたちに教えに行ったあとは、次に行くのが大学生の私たち自身楽しみで、連日の夜遅くまでの作業もあまり苦にならなかった。準備する過程では、授業で学んだことや新たに本やインタビューから学んだことが多く、何より自分たちの学習を深める活動につながった。今後もっと勉強をし、よりよい教材作りを行い、継続的に防災教育の普及に携わっていきたい。</p>	

今後の予定	来年度以降の進め方	<p>今年度は小学校 5 年生を対象を絞ったが、今後は、小学校の他の学年、中学校の教科学習に対応した同様の防災教育教材の開発を継続的に行う。また、作成した防災教育教材の配布、作成した防災教育教材を使っでの出前授業を行い、防災教育の普及活動を行う。</p> <p>今回の教材はすべて 1 時限（45 分）だけで学習できる内容であったが、2 時限対応用、半日対応プログラムなど、バージョンを増やしていく。</p>
	是非実施してみたい取り組み	<p>現在、防災・社会貢献ユニットでは、市民救命士を教えることのできるインストラクターの資格を取った学生が 28 名いる。今後は、市民救命士の講習と合わせた出前防災教育の実施や、語り部さんとのコラボレーションなど新しい形の防災教育を実践していきたい。</p> <p>現在の小学生はすでに震災より後に生まれてきた子供ばかりです。しかし、神戸にある大学生として、修学旅行生などの受け入れをして、震災について学んでもらうようなプログラムも企画・実行したい。</p>
自由記述	<p>今回の教材作りでは、本当にいろいろな方々にお世話になりました。お世話になった方々には、ここに書かせていただき、お礼の言葉とさせていただきます。（順不同）</p> <p>防災教育チャレンジプランの委員の先生方 兵庫県姫路市立旭陽小学校の先生方、生徒の皆さん 兵庫県立盲学校の先生方 語り部 KOBE1995 の田村さん、浅井さん、庄野さん、星野さん 小学館 横田さん 人と防災未来センターの資料室の方々 佐々木 久仁男さん 京都大学防災研究所 矢守先生 兵庫県立舞子高校 諏訪先生</p>	